



電 柱

名古屋大学名誉教授

佐々木 享

道を歩きながら目をこらして見ると、多くの道路には二種類の電柱が並んでいる。一つは電気を伝える配電線を架けた柱、もう一種類は電話線だけを架けた背丈の低い柱で、いずれも略称または通称は電柱あるいは電信柱である。一本の電柱の上のほうに配電線を、下のほうに電話線を架けている共架方式もある。

辞書などは電柱も電信柱も同じモノであるかのように説明しているが、歴史的には、明治初年にいち早く電信が導入されて電信線が張り渡されたから、電信柱のほうが古い。明治末年頃から各地に発電所が建設され、電気を伝える配電線が町中に張りめぐらされ始めた。その支柱は電信柱と同じように見えたから、「デンシンバシラ」と通称されるようになったらしい。これらの電柱は、いまの大人たちが若かった頃はすべて杉の木だった。つい二、三十年前から急速にコンクリートポールへの転換がすすめられ、いまでは木製の電柱はなくなった。

一方、最近ではコンクリートポールの電柱が見えなくなった街路もある。たとえば広小路通りのような名古屋の繁華な街などでは、電信電話の線や配電線が、いわばところかまわず張りめぐらされているのは街路の眺めもよくないし、安全でもないというわけで、地中に埋められた。また伝統的な落ち着いた町並みを保ちようとしている地域でも、電柱や電線が見えたのでは古い景観が台なしというので、やはり配線を地中に埋めている。

電柱一つとっても歴史的な変化がある。こんなところにも調べる面白さがある。